

# 保育を学ぶ学生の表現力と人間関係力の向上を目指した音楽劇 —関係5分野の連携による共同制作—

津山 美紀・矢野 洋子・富永 剛・田中 敏明

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

## 要 旨

学生による音楽劇の制作と上演において、表現力のみならず、人間関係力や自主性を向上させることを意図した取り組みを行った。その際、音楽表現、絵画造形表現、身体表現の3表現領域に加えて、幼児教育学及び心理学の5つの分野の担当教員が参画し、表現力の向上を目指した指導、幼児教育の本質に沿った音楽劇のあり方、学生の学習課題の設定、幼児の発達や興味を踏まえた音楽劇の内容構築、評価アンケートの作成などの役割を分担し取り組むこととした。グループ活動への参加意欲やコミュニケーション能力を向上させ集団活動の意義を理解させるため、脚本、音楽、美術、ダンス、演出の役割を学生に分担させ、制作した。その結果、表現意識や表現力そのものの向上とともに人間関係力の上昇もある程度確認できたが、学生それぞれに個人差があり、一人ひとりに対応した指導のあり方を追求していくことの必要性が認められた。

キーワード：保育、音楽劇、表現力

## 1. はじめに

保育者養成校における保育内容の指導法に関する授業は、「遊びを通してねらいを総合的に達成する」、「幼児の主体的な活動を促す」、「幼児一人ひとりの特性を生かした指導」など、学生に幼児教育の本質を理解させながら、この本質に沿った形で各領域の授業が展開されなければならない。しかしながら、領域「表現」の授業では、音楽、美術・造形、身体表現の分野ごとに授業が行われ、音楽分野では歌唱と楽器の演奏、美術・造形分野では絵画と造形、身体表現では体を動かすこと、という表現技術の習得に主眼がおかれることが多い。この方法は、技法や技術の習得においては有効であり、決して否定されるものではない。しかしながら、保育現場で幼児教育の本質に沿った確かな指導ができる保育者の養成という観点から考えると、この方法にはいくつかの限界が浮上してくる。

第一に、それぞれの分野の教員が異なる教育観にもとづいて授業を行う可能性がある。この場合は、学生の混乱を招き、確かな保育観、教育観を持たせることが困難になる。源ら(2012)<sup>1)</sup>の研究でもこの点について指摘されている。

第二に、幼児期のねらいが学生に理解されにくい可能性がある。幼稚園教育要領(2008)<sup>2)</sup>では領域表現の特質を「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と定義し、(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ(3)生活の中でイメージを豊かにし、さまざまな表現を楽しむ、という3つのねらいが設定されている。保育現場においてこれらのねらいを達成できる保育者を養成するためには、感性を育てることを含めて領域全体を見通した総合的な観点にもとづく授業が必要である。

第三に、保育内容の指導法がそれぞれの分野ごとに行われることによって、ねらいは多様な遊びを通して総合的に達成されるという幼児教育の特質が理解されないまま、音楽的な遊びでは音楽のねらいだけを考えるといった、小学校の教科的な意識で保育する保育者になってしまう可能性がある。領域表現の授業では特にこの傾向が強い。

このような問題点を改善するためには、各分野の教員が共通の教育観を持ち、連携してひとつの活動を作り上げる総合的な取り組みが求められる。

養成校の授業においても、幼児教育と同様に、クラスや学生一人ひとりの特性や課題に沿った指導が行われなくてはならない。学生の中には、表現することを得意あるいは苦手とするもの、特定の表現分野を得意あるいは苦手とするもの、人前で表現することを苦手とするものなどがおり、受講する学生全体および個々の特性を把握して、得意分野を生かしながら弱点を克服していく指導が行われなければならない。さらに、表現活動を制作し、発表する過程では、単に表現に関する態度、意欲、技術だけでなく、人間関係力を身に付けたり、幼児教育の本質や幼児の特性を学ぶ絶好の機会でもある。

最近、保育現場では、周囲の状況を判断して適切に行動する、年齢や苦手意識にとらわれず誰とでも協働できる、自分の都合だけでなく集団の事情を大事にする、自分の思いを相手に伝えるなど、人間関係力やコミュニケーション力の弱まりが指摘されている(永渕ら(2012)<sup>3)</sup>)。筆者ら(2014)がこれまで行った表現発表会に向けた作品作りでも、良い作品になるように努力していくことや、将来発表会の経験を生かしたいと思う学生は多いが、作品作りで積極的に自分の意見を述べていると感じている学生は半数程度にすぎない<sup>4)</sup>。

幼児教育や幼児の特性を理解し、学生の個性に応じた表現意欲や態度、技術を育て、人間関係力を涵養できるような領域表現の授業は、特定の分野の教員が単独で担当するだけでは実現することがむずかしい。伊達ら(2013)<sup>5)</sup>は、表現技術の総合的な学びを図り、学習方法として「グループワークによる課題解決型の学習法」を採用して効果をあげている。

そこで本研究では、音楽劇の制作と発表の授業において表現領域の3分野だけでなく、幼児教育学や心理学の教員も加え、事前に対象学生の表現意欲、態度、技術や人間関係力を把握して学生全体及び個々の特性を踏まえて教育目標を設定する総合型、課題解決型の授業効果を検証する。

3分野総合した授業を展開することによって、ひとつの活動には多くの内容が含まれ、ねらいが総合的に達成されることを理解し、得意分野を分担しそれをひとつの作品に統合するという役割分担の意義を実感し、また、幼児教育学や心理学担当の教員が参加することによって、幼児教育のねらいや内容の特質、幼児の興味や理解力を踏まえながら制作することができ、より効果的なアンケートの制作、実施、評価も可能になると考える。

#### 授業の目的

- ① 幼児教育のねらい、内容、方法の特色を中心に幼児教育の特質を理解する。
- ② 幼児の興味や理解の特徴を把握し、それにもとづいて制作する作品の展開、せりふ、上演時間、音楽などを考える。
- ③ 音楽・造形・身体表現のそれぞれの表現力の向上を図る。単なる表現技術だけでなく、場面をイメージし、イメージを生かした表現を心がける。
- ④ 表現発表会に向けて領域の枠を取り払い、総合表現芸術として自由な表現や創造的な活動を生み出す。
- ⑤ グループを構成する多様な個性を持つ学生同士が、共通の課題のもとに話し合いを重ね、協力して制作を進める中で、分担、協力することの意義を理解し、誰とでもかかわり協力できる姿勢、コミュニケーション能力、リーダーシップなどを身につける。
- ⑥ 学生自身が課題を設定し、企画・制作・運営を行うことで自主性を養う。
- ⑦ 地域の保育所・施設・幼稚園と触れ合うことにより、保育者としての喜びを感じ積極的な学びの姿勢を持つ。

## 2. 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、対象者に研究の主旨を説明し、個人が特定されないようプライバシーを確保することやアンケートの管理に十分留意することを口頭および文章で説明し、承諾を得てアンケート調査を行った。

## 3. 予備調査

音楽劇の制作に先立ち、学生の表現力および表現意識、人間関係の実態と課題を把握し、グループの編成や活動内容、指導の重点事項に反映させるため、音楽劇の制作と上演に参加する学生を対象に予備調査を実施した。

予備調査の対象者：幼稚園教諭養成課程、保育士資格取得希望者

保育内容（表現）を受講する1年生90名

予備調査の時期：平成25年9月

### ①予備調査1

#### 「表現力、表現意識に関する自己評価」

以下の項目について、+2から-2までの5段階評価を求めた。

- ・表現することを楽しんでいる
- ・人前で恥ずかしがらずに表現できる
- ・表現することに喜び、やりがいを感じる
- ・話し合いで積極的に自分の意見が述べられる
- ・よい作品を作るように努力しようと思う
- ・制作の経験を将来に生かそうと思う
- ・表現したいことが具体的にイメージできる
- ・自分のイメージを音楽、造形、身体を使って具体的に表現できる
- ・見てもらう人のことを考えた表現ができる

### ②予備調査2

#### 「人間関係力の自己評価および他者評価」

田中(1998)の自己診断基準<sup>6)</sup>にもとづいて以下の項目について、自己評価および自分のことをよく知る友人からの+2から-2までの5段階評価を求めた。

- ・苦手な人、嫌いな人にでも自ら関わる
- ・グループで活動するのは楽しい
- ・自分の都合よりグループの都合を優先する
- ・グループの活動の時など自分の考えを相手に伝えている
- ・自分の思いは仲間や友達によく伝わる
- ・相手が言うことを聞こうとしている
- ・自分の考えが間違っていると感じたら相手の考えに従う
- ・自分とは違う考えの人の考えが正しいかもしれないと考える
- ・相手の考えが間違っていると思うとき、はっきり伝える
- ・友達やグループの人が困ったときは助けている
- ・約束を守っている
- ・人からしてもらったことに感謝の気持ちを持っている
- ・悩んでいる時、友達に相談する
- ・掃除や行事などをさぼらずに頑張る

### ③予備調査の結果と考察

制作開始前の表現力に関する自己評価では、「この経験を将来に生かしたいと思う」、「難

しいときでもよい作品になるように努力したい」、「表現することが楽しい」の3項目で「とても」と「ある程度の」合計が7割を超え、多くの学生が表現することを楽しんだり、よい表現をしようとする基本的な態度も持っていることがわかる。その一方で、「表現したい内容がイメージできている」、「自分のイメージを音楽、造形、身体で具体的に表現できる」、「見てもらう人を考えた表現ができる」などの表現力や、「人前で恥ずかしがらずに表現できる」、「製作段階で積極的に自分の意見を述べている」という、人とのかかわりの中で制作し、人前で発表するという面では、自信を持っている学生がいる反面余り自信のない学生も少なくない。人数は少ないものの、表現活動を苦手とする学生やあまり意欲のない学生もいることがわかる(表1)。

制作活動を通して、表現技術を向上させ、表現することに自信を持たせること、制作過程の話し合いで自分の意見を持ち、それを表明できるようになることが全体的な課題となる。また、表現活動に対して興味や意欲を持ってない学生に対する個人指導も必要である。

人間関係力に対する評価では、「苦手な人、嫌いな人にでも自ら関わる」、「グループで活動するのは楽しい」という、グループ活動そのものに対する意欲が、得点も低く自己評価あるいは他者評価でのマイナス評価も少なくない。「自分の思いは仲間や友達によく伝わる」、「グループの活動の時など自分の考えを相手に伝えている」などのコミュニケーション能力でも比較的低い評価となっている。「人からしてもらったことに感謝の気持ちを持っている」、「約束を守っている」、「相手が言うことを聞こうとしている」、「自分の考えが間違っていると感じたら相手の考えに従う」、「友達やグループの人が困ったときは助けている」などは自己評価、他者評価ともに高い。グループ制作の意義を感じ取りコミュニケーション能力の向上を図る必要がある(表2)。

表1 制作開始前の表現力に対する自己評価(%)

質問項目	とても	ある程度	少し	思わない
表現することが楽しい	25.8	44.3	25.8	4.1
人前で恥ずかしがらずに表現できる	7.2	49.5	28.9	14.4
表現するとことに喜び、やりがいを感じる	13.4	25.8	53.6	7.2
製作段階で積極的に自分の意見を述べている	9.3	27.8	49.5	13.4
難しいときでもよい作品になるように努力したい	32.0	52.6	14.4	1.0
この経験を将来に生かしたいと思う	33.0	47.4	16.5	3.1
表現したい内容がイメージできている	15.5	41.2	37.1	6.2
自分のイメージを音楽、造形、身体で具体的に表現できる	14.4	39.2	37.1	9.3
見てもらう人を考えた表現ができる	16.5	39.2	39.2	5.2

表2 制作開始前の人間関係力に対する自己評価および他者評価（評価点）

評 価 項 目	自己評価		他者評価	
	平均	評価人数	平均	評価人数
苦手な人、嫌いな人にでも自ら関わる	0.23	19	0.45	15
グループで活動するのは楽しい	0.80	10	1.00	7
自分の都合よりグループの都合を優先する	1.00	2	1.18	4
グループの活動の時など自分の考えを相手に伝えている	0.50	10	0.85	6
自分の思いは仲間や友達によく伝わる	0.50	7	0.82	6
相手が言うことを聞こうとしている	1.30	1	1.20	4
自分の考えが間違っていると感じたら相手の考えに従う	1.28	1	1.13	2
自分と違う考えの人の考えが正しいかもしれないと考える	1.07	0	0.94	4
相手の考えが間違っていると思うときははっきり伝える	0.20	18	0.73	10
友達やグループの人が困ったときは助けている	1.27	1	1.48	0
約束を守っている	1.42	1	1.48	0
人からしてもらったことに感謝の気持ちを持っている	1.68	0	1.49	0
悩んでいる時、友達に相談する	1.08	7	1.04	6
掃除や行事などをさぼらずに頑張る	1.00	3	1.14	3

#### 4. 音楽劇の内容と制作、上演過程

音楽劇の内容選択においては、直接指導に当たる表現領域の3分野（音楽、造形、身体表現）の教員だけでなく幼児教育学、心理学分野の教員にも意見を求め、幼児が興味を持ち、理解できる音楽劇にするという意識を学生と共有しながら制作した。さらに、予備調査の結果から、「表現したい内容がイメージできている」、「自分のイメージを音楽、造形、身体で具体的に表現できる」ことに関して自信が持てない学生が多く見られたことから、制作の段階ではまずイメージをもち、そのイメージを言葉に表して教員や学生と共有するなどこの点を伸ばすための指導を、上演前には「見てもらう人を考えた表現」のための指導に力点をおいた。役割分担では、親しくない人とでも協力して活動できること、話し合いで自分の思いをきちんと出せるようになることを目標にして、親しい友達同士で役割分担するのではなく得意とする役割を選び、結果として親しくない学生が同じグループで活動をする。

- ① 音楽：2年生の授業受講者が、場面に合った音楽を作成し、演技者に歌唱指導を行う。
- ② 美術：大道具・小道具・背景・衣装と4グループに分け、ストーリーに合った道具を制作する。衣装は出演者と相談し出演者も作成する。
- ③ ダンス：ストーリーに合った場面で、学生自身がダンスの振り付けを考え、歌やせりふに合わせて調整する。

演出：2年生の4名が中心となり調整を行う。

## ④ 制作期間

平成25年9月～11月

## ⑤ 発表会

平成25年12月地域の保育園・施設・幼稚園の子ども、保護者を招待し発表会を開催する。

## ⑥ 表現力に関する自己評価

予備調査で使用した表現力に関する自己評価を用いて、制作過程盤、終盤および発表会後に自己評価を行った。

表3 制作過程および発表後の表現活動に対する意識、表現力に関する自己評価 (%)

質問項目		制作序盤	制作終盤	発表後	予備調査と終了後との差異
表現することが楽しい	とても	30.6	40.6	46.6	+20.8
	ある程度	49.0	33.3	30.7	-13.6
	少し	18.4	16.7	14.8	-11.0
	思わない	2.0	9.4	8.0	+3.9
人前で恥ずかしがらずに表現できる	とても	16.3	21.9	18.2	+11.0
	ある程度	36.7	27.1	35.2	-14.3
	少し	31.6	39.6	27.3	-1.6
	思わない	15.3	11.5	19.3	+4.9
表現するとことに喜び、やりがいを感じる	とても	14.3	31.3	47.7	+34.3
	ある程度	45.9	34.4	26.1	-0.3
	少し	33.7	22.9	17.0	+36.6
	思わない	6.1	11.5	9.1	+1.9
製作段階で積極的に自分の意見を述べている	とても	16.3	22.9	33.0	+23.7
	ある程度	40.8	36.5	30.7	+2.9
	少し	33.7	29.2	29.5	-20.0
	思わない	9.2	11.5	6.8	-6.6
難しいときでもよい作品になるように努力したい	とても	36.7	39.6	53.4	+21.4
	ある程度	46.9	39.6	31.8	-20.8
	少し	14.3	15.6	10.2	-4.2
	思わない	2.0	5.2	4.5	+3.5
この経験を将来に生かしたいと思う	とても	43.9	41.7	56.8	+23.8
	ある程度	43.9	38.5	29.5	-17.9
	少し	10.2	10.4	8.0	-8.5
	思わない	2.0	9.4	5.7	+2.6
表現したい内容がイメージできている	とても	20.4	30.2	43.2	+27.7
	ある程度	50.0	44.8	33.0	-8.2
	少し	25.5	14.6	14.8	-22.3
	思わない	4.1	10.4	9.1	+2.9

自分のイメージを音楽、造形、身体で具体的に表現できる	とても	20.4	26.0	40.9	+26.5
	ある程度	50.0	46.9	36.4	- 2.8
	少し	24.5	17.7	13.6	-23.5
	思わない	5.1	9.4	9.1	- 0.2
見てもらう人を考えた表現ができる	とても	26.5	27.1	47.7	+31.2
	ある程度	42.9	47.9	33.0	- 6.2
	少し	28.6	13.5	11.4	-27.8
	思わない	2.0	11.5	8.0	+ 2.8

## 5. 結果と考察

表3は、制作過程の序盤、終盤および発表後の学生の表現活動に対する意識と表現力の自己評価結果を数値で示したものである。さらに、予備調査時の自己評価と発表後の自己評価との差異を、「とても思う」「ある程度思う」「少し思う」「思わない」の4段階で表示した。

発表会終了後の自己評価を予備調査と比べると、全項目にわたって「とても思う」の割合が増え、「ある程度思う」、「少し思う」の割合が減少している。その中で、「表現するとことに喜び、やりがいを感じる」、「難しいときでもよい作品になるように努力したい」、「この経験を将来に生かしたいと思う」という表現に対する楽しさや意欲、「表現したい内容がイメージできている」、「自分のイメージを音楽、造形、身体で具体的に表現できる」、「見てもらう人を考えた表現ができる」という表現力に関する項目は、制作の途中よりも発表終了後に自己評価が高くなっている。発表し終えたという満足感や、発表を通して制作過程を振り返ることが表現する喜びや満足感、自分の表現力に対する自信を生んだものと思われる。ただ、「人前で恥ずかしがらずに表現できる」は「とてもそう思う」と回答した学生は18%にとどまっている。

その一方で、全項目にわたって、全体の1割前後の学生が「思わない」と回答し、「表現することが楽しい」、「人前で恥ずかしがらずに表現できる」、「表現するとことに喜び、やりがいを感じる」、「難しいときでもよい作品になるように努力したい」、「この経験を将来に生かしたいと思う」、「表現したい内容がイメージできている」では、予備調査の段階よりも増加している。制作の終盤で、全体でひとつの作品にまとめる段階になって、「思わない」と感じるようになる傾向が認められる。

音楽・美術・身体表現の3領域共同の制作を行ったこと、役割を分担し最後にひとつの作品にまとめたことについての感想を自由記述で尋ねてみた。「専門的な事を深くできたのでよかった」、「短期間でスキルアップができ、合理的な手段でよいと思う」、「1つの授業に対して多くの事を学べてよいと思う」、「音楽劇でも、衣装や背景、体の動きなどで総合的に作ることがわかった」、「自分の得意分野を活かせるのがよい」、「達成感があった」など、自分の得意分野を活かしながら総合的に学習できることを肯定する意見が数多く見られた。これ



は、表現3分野が参加して総合的に一つの作品を作り上げた効果である。「見てくれる子どものことを考えるようになった」など見てもらう人を考えた表現ができるようになったという意見、「仲間と作業することで楽しいと感じることが出来た」、「役割分担ができてよいと思う」、「全員で同じことに向かって作業を進めるのは楽しかった」、「協調性がうまれた」、「他の人がしていること、頑張っていることを知ることが出来た」など、それぞれのグループで作上げたものを合わせてひとつの作品を作るという経験によって、目的に向かって共同することの意義と楽しさ、役割分担の大切さを感じ取ることができたという意見が多く見られた。一方、「人前で恥ずかしがらずに表現できる」については「とても思う」学生の割合が予備調査と比べて11%の上昇にとどまっており、一回の発表ではあまり効果がないことがわかる。発表の機会を可能な限り多くすることを考えなければならない。

「一緒に演技しても仲良くなれなかった」、「面倒くさかった」、「すごく負担の大きい人もいるので、そういう人へのサポートを多くすると思う」という意見もある。こうした思いを持つ学生は、もともと表現を苦手とする学生がほとんどである。表現することの楽しさや表現技術、誰とでも協力できる、コミュニケーション能力のすべてにおいて、全体的には向上したことに満足せず、このような学生に対する指導方法を検討していく必要がある。

#### 引用文献

- 1) 源 証香、小谷 宣路 (2014) 「保育内容研究のあり方に関する一考察—保育者養成校における担当教員の専門分野の実態調査から—」  
埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要13号 PP.9～15
- 2) 文部科学省 (2008) 「幼稚園教育要領」
- 3) 永淵 美香子、矢野 洋子、田中 敏明 (2012) 「学生の資質の向上に対する人形劇制作の効果」九州共立大学研究紀要 第3巻 第1号 PP.87
- 4) 津山美紀、富永 剛、相原 豊 (2014) 「表現力育成についての一考察—表現発表会をとおして—」九州女子大学紀要 第51巻1号 PP.69
- 5) 伊達 由実、村田 夕紀、原 祐子 (2013) 「新設科目 保育内容・表現（総合）における学びと課題」四天王寺大学紀要 第56号 PP.430
- 6) 田中 敏明 (1998) 『保育者として高まるための自己診断160』

## **A Musical Play that Aimed at Improving the Expressiveness and the Interpersonal Relationships of Students in Childcare —A collaboration between 5 related fields—**

Miki TSUYAMA, Yoko YANO, Tsuyoshi TOMINAGA, Toshiaki TANAKA

### Abstract

In the production and performance of the children's musical play by students, they not only improved their expressive capabilities- they also carried out initiatives that aimed at elevating their interpersonal relationships and level of independence. Throughout the event, in addition to musical expression, expression through painting pictures and models, and physical expression, early childhood education teaching staff and teaching staff in five different fields of developmental psychology participated and cooperated together in roles. In order to improve the students' desires to participate in group activities and their communicative abilities as well as make the significance of group activities understood by them, they were assigned roles of production of, as well as produced, the script, music, art, and dances. The result of that was it necessary to seek for proper roles that coped with each individual student and that they looked forward to expressing themselves; their expressiveness improved along with the strength of their interpersonal relationships to a certain extent although they had individual differences between each other.

Keyword : student of early childhood education, musical drama, ability of expression